

## 霞ヶ浦の舟運による都市空間形成

茨城大学大学院 学生員 ○土本 真俊 茨城大学工学部 正会員 小柳 武和  
 茨城大学工学部 正会員 志摩 邦雄 茨城大学工学部 正会員 桑原 祐史

## 1. はじめに

霞ヶ浦には昔から舟運が発達しており、霞ヶ浦の湖岸には河岸（かし）とよばれる川の港が存在し、多くの舟・船によって運ばれてきた人や物資で河岸は大変賑わっていた。特に土浦の河岸は霞ヶ浦の商業の中心地として、賑わいを見せ、素晴らしい景観であった。しかし、それらの景観は舟運の衰退と共に失われていった。また、舟運という視点から都市空間を捉えた研究は、松浦らの研究<sup>1)</sup>と土木史としての研究以外ほとんど行われていない。また最近、水辺空間が高いアメニティ空間として注目されており、デザインや空間形成の手法の整理等が強く求められている。よって、舟運が発達していた当時の景観を再認識し、舟運によって形成された都市空間を現代の水辺景観を形成する際に利活用できないだろうかと考え、本研究では茨城県土浦市を対象とし、舟運という視点から都市空間を把握する。具体的な内容は以下の3点である。

- (1) 大正・昭和・現在の地図を比較することにより、舟運によって形成された商業形態の特性を把握する。
- (2) 写真を分析し、舟運によって形成された街並みの変遷・景観特性を把握する。
- (3) 以上より舟運によって形成された都市空間の特性を商業形態・景観の観点から把握する。

## 2. 対象エリアの設定



図1 対象エリア

次の図1は本研究の対象エリアを示したものである。本研究では土浦市の旧川口川が流れていた市街地を対象とする。そのエリアとして、旧川口川の河口から旧桜橋が架かっていた部分が対象エリアとなる。選定理

キーワード 舟運，土浦，霞ヶ浦，景観，写真

由としては、舟運の多くの舟・船が霞ヶ浦から桜橋付近まで川を上ってきたため、旧川口川付近は舟運によって大変賑わっていたからである。

以上のような理由から本研究では、旧川口川河口から旧桜橋までの約1kmを対象エリアとする。

## 3. 分析方法

舟運が発達していた明治～昭和中期までの旧川口川周辺の街並みが写り込んだ古写真140枚以上を収集した。その中から53枚を分析対象に選定した。そして、写真の現在における視点場を把握し、各視点場で写真1～5のように古い年代から現在までを並べ、各24点の景観の移り変わりを分析した。その際、文献資料・ヒアリングから建造物 河川 舟・船 構造など、各視点場で比較できる景観要素に着目し、時代背景を考慮しながら景観要素の特徴を把握した。



写真1 明治末期



写真2 大正初期



写真3 昭和初期



写真4 昭和26年



写真5 平成15年

また、舟運と商業には深い関連性があったと考え、大正期の絵地図、昭和2年の土浦町案内図、平成12年土浦のゼンリンの住宅地図を比較し、商業の状況や移り変わり、また、商業と舟運との関係を分析した。

また、舟運と商業には深い関連性があったと考え、大正期の絵地図、昭和2年の土浦町案内図、平成12年土浦のゼンリンの住宅地図を比較し、商業の状況や移り変わり、また、商業と舟運との関係を分析した。

連絡先 茨城大学工学部都市システム工学科 〒316-0033 茨城県日立市中成沢町4-12-1 (0294-38-5175)

#### 4. 分析の結果

写真による分析より明治期～昭和初期にかけての土浦旧川口川沿いでは次の6つの景観的特徴を挙げることができた。

川口川の至る所に川へ降りる階段（出し）、また、船の係留機能が備わっている。

川口川沿いの建物のファサード（建物の正面）が川口川に向かって建っている。

街の中に川が流れているため、街の見通しが良く、奥行きのある景観である。

約1kmの流域に5つの橋が架かっているため、橋を対象とした景観が特徴的である。

街の中の舟・船による景観が特徴的である。

舟・船から荷降ろしをするためのスペースとして川沿いの道幅が広くつくられている。

このような、景観的特性を写真より把握することができた。現在においては、写真の比較により景観のあまりの変貌を知ることができたが、残っている景観はほとんど確認することができなかった。また、地図を分析した結果、商業が場所によって特色を持つことが分かった。それらを3つのエリア、a, b, c とした。図2は3つのエリアの位置を示したものである。

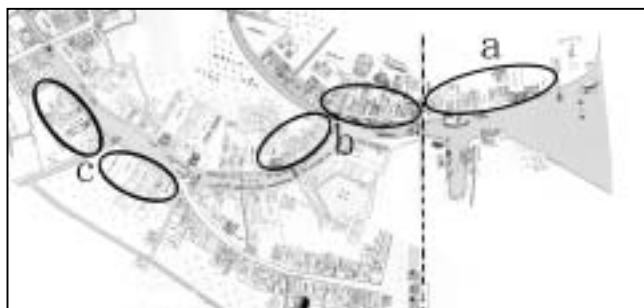


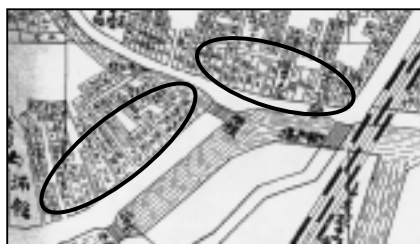
図2 各エリアの位置<sup>2)</sup>

##### a エリアについて

aエリアは港湾部分であり、大工などの職人や造船所、材木店など舟・船に関する職業の人々が住んでいた。そのため、写真1のように常に舟・船が停泊しており、aエリアでは舟・船が特徴的な景観を構成していたことが分かる。

##### b エリアについて

写真だけでは明らかにすることができなかったが、地図1から円で記したように、川魚



地図1 明治2年

屋を中心とした小さな商店が集まっており、それらの店は間口が小さく、約100mと短い距離に商店が密集しているため、にぎやかな景観を形成していたことが分かる。

##### c エリアについて

c エリアでは、繭市場を中心とした街並みが形成され、他のエリアとは異なった写真6のよう



写真6 昭和初期

な象徴的な建物が建っていた。それらが当時の川口川沿いのシンボルの役割を果たし、シンボルを中心とした街並みが形成されていた。

表1 各エリアの商業と景観の関係

|       | 中心となっている商業  | 景観の特性        |
|-------|-------------|--------------|
| a エリア | 職人・船に関する職業  | 舟・船による景観     |
| b エリア | 川魚屋         | 賑わいのある景観     |
| c エリア | 繭市場を中心とした商業 | シンボルを中心とした景観 |

次の表1は各エリアの特徴をまとめたものである。

この表から商業形態には舟運が関係していることが分かった。また、舟・船の種類、停泊する位置によって、商業の形態が変わることが分かった。

このように舟運が発達していた当時の川口川沿いは、商業的に大きな3つのエリアに分かれており、各エリアでの景観は商業と深く結びついている。舟運と商業的な形態がそのエリアの特徴的な景観を形成していたことが把握できた。

#### 結論

写真・文献資料より舟運によって形成された街並みの変遷と時代背景、景観特性を把握し、旧川口川における6つの景観的特徴を挙げることができた。大正・昭和・現在の地図より舟運によって形成された商業の特色を把握し、3つのエリアに分類することができた。

以上の2点より旧川口川では舟運によって形成された商業形態が景観を生み出していた。つまり、商業と景観には関連性があることが分かった。

#### 参考文献

- 1) 松浦茂樹・石崎正和・矢倉弘史：湖辺の風土と人間，そして，223p，1992．
- 2) 佐賀進・佐賀純一：土浦の里 絵と伝聞，筑波書林，211p，1981．
- 3) 佐賀純一・佐賀進：田舎町の肖像，図書出版社，477p，1993．